

# 頼山陽「西遊詩卷」訳注(二)

谷 口 匡

前号に引き続き、「西遊詩卷」所収の詩を底本の順に従って紹介する。今回訳注を施すのは次の二十一首(連作のもの及び詩題を欠くものは括弧内に初句を示す)である。

- 16 赤関竹枝詞 A (誰向滄溟収玉魚) B (駐蹕蛟宮歲幾過) C (置置春帆破海煙) D (万壘撰酒附商舟)  
E (幾点漁灯乱月光) F (蔵橙戸戸及東風)
- 17 (緑酒紅灯醉眼迷)
- 18 発赤関留別諸友 A (煙檣欠処閃噉紅) B (舟遠回顧君宁立)
- 19 筑前尋亀元鳳
- 20 寓松子登家賦即事 21 題亀元鳳女少琴画竹
- 22 為子登題画枇杷
- 23 長碕竹枝 A (肥海松魚始上街) B (白榜青尊乘暮天) C (朝朝举案与眉齐) D (眼語相承両意同)  
E (鬢側釵横夢一場) F (碧欄紅燭閃瓊卮) G (煙波源处是蘇州) H (金鬢芳柔压海腴)

訳注

16 赤關竹枝詞 節録六首 赤関竹枝詞 六首を節録す

A

誰向滄溟收玉魚

誰か滄溟そうめいに向むかって玉魚ぎよくぎよを収おさめん、

一龕香火當宸居

一龕いちがんの香火こうか宸居しんきよに当あたる。

滿前簪笏今何在

前まえに滿みちし簪笏しんこつ今何いまいずくにか在ある、

幾隊鵷行女校書

幾隊いくたたいの鵷行えんこう女校書じよこうしよ。

下関の歌 六首を選んで書く

誰ももはや海に向かつて玉の魚を手向けはしまい、安徳天皇の霊も今では、香がたかれ灯明に照らされた厨子ずしの中で安らいでいるであらうから。／天皇の御前に満ちていた高官や官女たちは海の藻くずとなって消えてしまったが、今日の先帝会では、女郎たちが昔の朝廷の官吏のように何隊か行列をなしている。

〔竹枝詞〕樂府の一種。七言絶句を形式とし、土地の風土や兒女の心情などが歌われることが多い。〔滄溟〕海。〔節録六首〕『詩鈔』卷三、『詩集』卷十一では「戲作赤関竹枝」と題し、前者は八首、後者は十首を収める。但し、以下の詩のうちEについては、

『詩鈔』『詩集』とも「赤閑雜詩」の一首とする。このAの詩は、『詩鈔』では八首の第一首、『詩集』では十首の第一首として収め、それらは「可憐兒女説先皇、幾隊紅妝幾瓣香。簪笏滿前人不見、金釵猶作鸞鵲行」に改める。「玉魚」玉製の魚。副葬品として用いられた。「籠」神仏の像を安置する小さな入れ物。厨子。「香火」神仏に供える香と灯明。「宸居」天子が居住する。安徳天皇の靈がそこに存在する、という意。「簪笏」冠を固定するかんざしと笏。転じてそれを身につけた高官の意で、ここでは、安徳天皇に仕えた平家の公家たちを指す。「鵝行」朝廷の官吏の行列。ここでは、安徳天皇を祭った先帝会において、官女役の女性が整然と列をなしていることを指す。「女校書」妓女のこと。

B

駐蹕 蛟宮 歲幾過  
ひるまをさかきつしを  
 蹕を蛟宮に駐めてより歲幾たびか過ぐ、  
 水邊 猶見 簇嬌娥  
みづへにな み きまつがむろ  
 水邊猶お見る嬌娥簇がるを。  
 至今 許著 輕羅襪  
いまいた ゆるら  
 今に至るまで著くるを許す輕羅の襪、  
 應爲 當年 凌綠波  
まさにな ちうねん りよな  
 應に為すべし當年 綠波を凌ぐを。

安徳天皇が入水してからも幾年が過ぎただろうか、天皇に仕えていた女官たちは一緒に海に沈んでしまったが、その水辺にある下関の花街は今も美しい女郎たちで賑わっている。／彼女らには今でも薄絹の足袋を履くことが許されているから、かつての女官たちも同じように足袋を履いて船上で天皇にお仕えしていたであろう。

『詩鈔』は八首の第一首、『詩集』は十首の第二首として収める。この詩はその初案。「駐蹕」天子が行幸して滞在する。『詩鈔』

『詩集』は「託蹠」に改める。「蛟宮」 蛟人（水中に住むという人魚）がいる所。ここは安徳天皇が壇ノ浦の戦いで入水したことを喩える。『詩鈔』『詩集』は「蛟宮」に改める。「簇嬌娥」「嬌娥」は美人。『詩鈔』『詩集』は「旧宮娥」に改める。「輕羅襪」 軽い薄絹の足袋。下関の遊女は足袋を履く習慣があった。「為」『詩鈔』『詩集』は「記」に改める。「当年」『詩鈔』『詩集』は「朝天」に改める。「凌緑波」 青々とした波を渡って行く。かつて女官たちが船上で安徳天皇に仕えたことをいう。『文選』に収める三国魏の曹植の「洛神の賦」に「波を陵いで微く歩み、羅襪 塵を生ず」とあるのに拠る。

C

疊疊春帆破海煙 疊疊たる春帆 海煙を破る、

意中人到定今年 意中の人 到るは 定めて今年ならん。

明眸一樣凝秋水 明眸一樣に秋水を凝らし、

姉望丹船妹越船 姉は丹船を望み妹は越船。

何艘もの春の船が海上のもやを破って近づくの見える。恋人はきっと今年にはやって来るに違いない。／ぱっちりとした目をした美人は同じように遠くを凝視して、姉は丹後の船、妹は越前の船をじっと見つめている。

『詩鈔』は八首の第三首、『詩集』は十首の第三首として収める。「疊疊」 幾重にも重なりあっているさま。「春帆」 春の船。「海煙」 海上のもや。「意中人」 恋人。「定」 きっと。「明眸」 ぱっちりした目をした美人。「秋水」 澄んだ目の喩え。「丹船」 丹後の船。「越船」 越前の船。

D

萬罌攝酒附商舟  
 堆岸黃包映綠油  
 醱烈尤推鶴字號  
 駕人醉夢上揚州

ばんおう せつしゆ しょうしゅうふ  
 万罌の摂酒 商舟に附し、  
 たいがん こうほう りよくゆう えい  
 堆岸の黄包 緑油に映ず。  
 ひょうれつともおす づるしごう  
 醱烈尤も推す鶴字号、  
 ひと すいむ の  
 人を醉夢に駕せて揚州に上らしむ。

おびただしい数の灘や伊丹の酒樽が商船によって運ばれ、岸にうずたかく積まれた黄色い酒樽が緑色の海面に映っている。／香りのよさでは「鶴」の銘柄の酒が第一で、人を気持ちよくして思いのままの境地に至らせる。

『詩鈔』では八首の第六、『詩集』では十首の第六に置く。この詩はその初案。「万罌」おびただしい数のかめ。「罌」はここでは酒樽の意か。『詩鈔』『詩集』は「年年」に改める。「撰酒」撰津の国の酒。すなわち、灘や伊丹の酒。「附」車や船に乗る。「推岸黄包映綠油」「黄包」は未詳であるが、酒樽を指すか。「綠油」は緑水、海岸の水面。この一句を『詩鈔』『詩集』は「磊落万罌堆岸頭」に改める。「醱烈」未詳。香りのよい清酒の意か。『詩鈔』『詩集』は「清醱」に改める。「鶴字号」鶴の字のつく酒の銘柄。例えば「沢の鶴」など。「醉夢」酔ったり夢を見たりした時のようなわけのわからない状態。「上揚州」思いのままの境地に至る。故事に、腰に十萬貫の錢を纏い、鶴に乗って揚州に上ることで三つの欲望（揚州の刺史になること、財産を築くこと、鶴に乗って空を飛ぶこと）が満たされるとしたこと（淵鑑類函）鳥部三・鶴三に引く『殷芸小説』に見える）に基づくが、ここでは「鶴」の銘柄の酒を飲むことで愉快な境地に至る意。また唐の杜牧の「遣懷」の詩の一句「十年一たび覚む揚州の夢」をも踏まえる。なお『詩鈔』は「揚」を「揚」に作る。

E

幾點漁燈亂月光

幾點いくてんの漁燈ぎようとう 月光げつこうを乱みだし、

桅竿無影夜茫茫

桅竿きかん 影無かげなく夜茫茫よるぼうぼう。

依稀認得泊船處

依稀いさとして認得みと得えたり船ふねを泊はくする處ところ、

煙外有人呼賣漿

煙外えんがい 人有ひとあり呼よんで漿しやうを売うる。

月明かりの中、何艘かの漁船のいさり火が見えるが、それ以外は帆柱の影もなく、一面の夜霧に覆われている。／もやの向こうから聞こえる飲み物を売る人の声で、そのあたりに船が停泊しているらしいのがぼんやりとわかる。

『詩鈔』『詩集』ともに「赤関雑詩」の一首として収める。「漁灯」漁船の明かり。いさり火。「桅竿」帆柱。「茫茫」はっきりしないさま。ここでは夜霧に視界が遮られることをいう。「依稀」ぼんやりとして明らかでないさま。

F

藏橙戸戸及東風

橙とうを藏ぞうして戸こ戸とうふう東風におよに及び、

和得豚羹味不窮

豚羹とんこうに和わし得えて味あじわい窮きままらず。

織手擘開黃玉顆

織手せしゅ擘つんざき開ひらく黃玉こうぎよくの顆か、

愛佗香霧暎春葱

愛あいす佗かの香霧かうむの春葱しゆんそうに暎ふくを。

どの家もみなかばすを蓄えて春を迎え、河豚料理に絞って無限の味わいを作り出す。／女性がその黄色い果実を剥く時、香ばしい果汁がしなやかな手に向かって弾け飛ぶのにうっとりする。

『詩鈔』は八首の第八首、『詩集』は十首の第八首として収める。この詩はその初案。「橙」だいたい、ゆずの類。ここではかばすを指す。「戸」家々。どの家も。「及」『詩鈔』『詩集』は「候」に改める。「東風」春風。「豚羹」ここでは河豚を煮た料理をいう。山陽の「赤関竹枝の稿本の後に書す」(『頼山陽全書』所収の『頼山陽文集』外集七四五〜七四七頁)に赤関の人、河豚を食らう。婦人小兒と雖も皆な然り。旅客の敢えて食らわざる者を視れば、嗤って以って怯と為す。余甘んじて嗤咲(『嘲笑』)を受け、而して食らわざる也。或るひと教うるに一法を以ってし、賽河豚と曰う。その法に、海魚の味わい淡き者を取って、その肉を轟切(『切って薄片にする』)し、塩豉(『味噌の類』)もてこれを煮る、太だ熟ること勿かれ、随って取り(『煮るはしから取り出してゆき』)、葱白(『葱の白い部分』)・椒紅(『トウガラシの外皮』)・菜菔(『大根』)の三物の末なる者(『細かく砕いたり卸したりしたもの』)を和して、下とすに橙瀝(『かばすの汁』)を以ってすれば、風味、西施乳(『河豚の腹中の白い部分』)に髣髴たりと云う」とある。「織手」女性の細く柔らかな手。『詩鈔』『詩集』は「織指」に改める。「佗」『詩鈔』『詩集』は「他」に改める。「噉」水分を吐き出す。ここではかばすから香気が弾け飛ぶ意。「春葱」女性のしなやかな手を喩える。

關頭阿彌陀寺、安養和帝像。每歲暮春幾望、妓女成隊進香、曰先帝會。海内妓院、許穿羅襪者、唯赤關耳。稱養和宮人之遺傳承至今。

關頭の阿彌陀寺、養和帝の像を安んず。每歲暮春幾望、妓女、隊を成して香を進むるを、先帝会と曰う。海内の妓

院、羅襪を穿くるを許す者は、唯だ赤関のみ。養和の宮人の遺、伝承して今に至ると称す。

下関の阿弥陀寺には、安徳天皇の像が安置してある。毎年春三月十四日、妓女たちが隊列を成して焼香する儀式を「先帝会」と称する。全国の妓楼のうち、妓女に薄絹の足袋を履くのを許しているのは下関だけである。安徳天皇に仕えた女官たちの遺風が伝承して今なお残っているといわれている。

この五十一字は『詩鈔』『詩集』には見えない。但し、Aの自注に「毎歳三月、諸倡詣阿弥陀寺、称先帝会」、Bの自注に「倡著鞆、佗処所無云」とある。「関頭」国境上の関所、出入口。ここでは下関を指す。「阿弥陀寺」現在の赤間神宮。安徳天皇を祭神とする神社であるが、明治以前は寺であった。「養和帝」15の詩の注を参照。「暮春」陰曆三月。「幾望」陰曆の十四日。「進香」焼香する。「先帝会」安徳天皇の忌日に阿弥陀寺で行われた法会。現在の先帝祭。「許穿羅襪者、唯赤関耳」山陽の「赤関竹枝の稿本の後に書す」の文に「倡妓、襪を穿くるを得ざるは、法也。独り赤関のみ然らず。その客を待つや、抗礼（＝対等の礼を行う）して相い下らず。他土の如きに非ずと云う」とある。「妓院」妓楼。「宮人」宮中の女官。

17

緑酒紅燈醉眼迷	緑酒 <small>りよくしゆ</small> 紅燈 <small>こうとう</small> 醉眼迷 <small>すいがんまよ</small>
萬檣影裏月高低	萬檣 <small>ばんしやう</small> 影裏 <small>えいり</small> 月高低 <small>つきこうた</small>
憑欄忽覺身爲客	欄 <small>らん</small> に憑 <small>よ</small> つて忽 <small>たちま</small> ち覺 <small>おぼ</small> ゆ身 <small>み</small> は客 <small>かく</small> たるを、
隔水青山是鎮西	隔水 <small>かくすい</small> の青山 <small>せいざん</small> は鎮西 <small>ちんせい</small> 。



酒に酔ってぼんやりとした眼で、月光に照らされた多くの船の帆が波に従って上下するのを眺める。／欄干によりかかると水を隔てて九州の山々が見えてきて、自分が旅の身にあることに気づかされる。

『詩鈔』卷三に「戲作赤関竹枝八首」の第七首、『詩集』卷十一に「戲作赤関竹枝十首」の第七首として収める詩の初案。「緑酒紅灯」美酒と赤ちようちん。享楽にふけるさま。「醉眼」酔ったあとのぼんやりした眼。「檣」船の帆。「憑欄」『詩鈔』『詩集』は「醒來」に改める。「客」旅人。「鎮西」九州。

18 發赤關留別諸友

赤関を發し諸友に留別す

A

煙檣缺處閃噉紅	煙檣欠くる処閃噉紅く、
候晴短檣乘輕風	晴を候って短檣輕風に乗る。
一岸山陽地已盡	一岸の山陽地已に尽くるも、
看君送我情不窮	看る君の我れを送って情窮まらざるを。

下関を出發して友人たちと別れる

船の帆が遠くもやにかすんで見えなくなるあたりに、ひらめき輝く真赤な朝日が昇り、空の晴れ具合をうかがいながら私の小さな舟は軽やかな風に乗ってぐんぐん進む。／山一面に朝日に映えた陸地もはやすっかり見えなくなってしまうが、私を見送ってくれるあなたの熱い気持ちはいつまでも尽きることがないと思つよ。

この18の詩はA・Bとも『詩鈔』には見えず、『詩集』卷十一に「発赤閑留別諸友二首」と題して収める。「煙櫓」もやにかすんだ船の帆。「閃電」ひらめき輝く朝日。「候晴」空の晴れ具合をうかがう。「短櫓」小舟。「櫓」は「櫓」と同じで、舟を漕ぐ櫓のこと。「二岸」『詩集』は「一片」に作る。「山陽」山の南側。

B

舟遠 回顧 君 宁立  
舟遠ふねとほ 回顧かいて 君 宁立きみちよりつ、

影没 厓渚 轉曲 中  
影かげは厓渚がしよに没ぼつす轉曲てんきよくの中ちゆう。

相呼 猶欲 絃心 緒  
相あい呼よんで猶なお心緒しんしよを叙のべんと欲ほつするも、

無奈 櫓聲 亂人 語  
奈いかんともする無なし櫓聲ろせい 人語じんごを乱みだすを。

私の乗る舟は下関を出発してどンドン遠ざかる。振り返ると、あなたは岸にじっとたたずんでいるが、舟が動き水路が曲がってゆくうちにその影も水辺に没してしまった。／呼びかけて別れ難い気持ちを伝えようとしても、その声は櫓の音にかき消されて、届きようもない。

〔宁立〕たたずむ。〔厓渚〕みずべ。〔転曲中〕舟の位置が転じ曲がるうちに。〔心緒〕心情。〔無奈〕どうすることもできない。

19 筑前尋龜元鳳  
筑前ちくぜんにて龜元鳳きげんほうを尋たずぬ

藝城分手 夢空 尋  
芸城げいじょうに手てを分わかちてより夢ゆめに空むなしく尋たずね、

雞黍今朝喜盃簪

鶏黍けいしよ 今朝こんちやう 盃簪こうしんを喜ぶよろこ。

四海文章纒屈指

四海しかいの文章ぶんしやう纒むすに指ゆびを屈くつし、

一杯醞醪且論心

一杯いつぱいの醞醪れいりよくしほら且かつ心こころを論ろんす。

長林擁屋鶴巢穩

長林ちやうりん 屋おくを擁ようして鶴巢かくそう穩あたやかに、

積水當窗鵬影沈

積水せきすい 窓まどに當あたって鵬影ほうえい沈しずむ。

風樹知君同我感

風樹ふうじゆ知知る君きみ 我わがが感かんに同おなじきを、

酒間有淚暗沾襟

酒間しゆかん有あり暗あんに襟えりを沾うるす。

筑前に龜井昭陽を訪ねる

あなたと広島で別れてから何度も夢の中で訪ねたが、今朝、筑前の地で心からもてなされて、会えたのを喜んでゐる。／全国の中でも数少ない名だたる文章家のあなたと、こうして一杯の美酒を酌み交わし、腹を割って語り合ふことができた。／家屋を取り囲む深い林はいかにも平和であちこちに鶴が巢を作っているが、大海に面した窓からは鵬が沈むが見える。／私も父を失った今、あなたの気持ちがかかるから、酒を飲みながら人知れず涙が襟を濡らすのである。

『詩鈔』卷三、『詩集』卷十一に「龜井元鳳招飲賦贈」と題して収める。(龜元鳳)筑前の儒者龜井昭陽(一七七三—一八三六)のこと。元鳳は字。『全伝』文政元年四月の条に「龜井昭陽(四十六歳)に招かれ、百道林(もぢぢ)の宅を訪ふ」とある。(芸城)広島。(分手)離別する。『全伝』の続きに「文化三年、広島以来、十三年目の会見であった」とある。(鶏黍)鶏を殺し、黍めしを作る。友

人を心からもてなす意。『論語』微子篇に「子路を止めて宿せしめ、鶏を殺し黍を為りて之を食らわしむ」とあるのに拠る。「盞簪」士人の集まり。『易経』豫卦九四に「朋盍い簪まる」とあるのに拠る。『醴醑』醴酒と醑酒。美酒の名。『長林』『詩鈔』『詩集』は「高林」に改める。〔擁〕つつみ囲む。〔鶴巢〕鶴の巢は、平和で静かな生活を象徴する。唐の王維の「山居の即事」の詩に「鶴は松樹に巢くうて遍く、人は鞞門を訪るること稀なり」とある。〔積水〕大海。〔当窓〕窓に向かう。ここでは窓から大海が眺め渡せる意。〔鵬影沈〕「鵬」は『莊子』に現れる巨大な鳥の名。昭陽の父親、亀井南冥が文化十一年に没したことをいう。〔風樹〕親を亡くして、もはや孝養を尽くすことができないことをいう。『韓子外伝』九に「樹静ならんと欲して風止まず、子養わんと欲して親待たず」とあり、『孔子家語』致思篇にも殆ど同じ語が見えるのに拠る。〔同我感〕山陽も文化十三年に父の春水を失った。

20 寓松子登家賦即事

松子登の家に寓し、即事を賦す

幾椀新茶陶客情

幾椀の新茶 客情を陶し、

昨來中酒廢杯觥

昨來中酒 杯觥を廢す。

蘆簾日薄搖無影

蘆簾 日薄くして揺いて影無く、

瓦鼎風微沸有聲

瓦鼎 風微かにして沸いて声有り。

暑路養痾衣尚熟

暑路 痾を養って衣尚お熟し、

羈窗作字手常生

羈窓 字を作って手常に生なり。

共評畫軸消長晝

共に画軸を評して長晝を消し、

更喚家童取短檠

更に家童を喚んで短檠を取る。

松永子登の家に滞在し、眼前の出来事を詩によむ

昨日来、飲み過ぎたので、今日は酒をやめ、何杯かの新茶で旅の憂さをはらす。／葦のすだれは日が弱いために風で揺れても影がなく、素焼きの鍋に湯の沸く音が微かな風で運ばれてくる。／夏の旅路に療養する私は、相変わらず冬の練絹の服を着たまま、こうして旅先においていつも下手くそな字を書いている。／あなたとともに掛け軸を批評しあつて長い一日をすごし、日が暮れると下男に燭台を取らせてさらに批評を続ける。

『詩鈔』卷二に「即事似東道松永子登」と題して収める詩の初案。『詩集』卷十一は初案を収め、題名のみ『詩鈔』に従つて改める。〔松子登〕松永子登のこと。博多の貿易商で、名は豊、字を子登といい、花遁道人と号した。山陽は文政元年四月二十一日に博多に入り、以後五月十七日に太宰府に発つまで、子登宅に滞在した。〔陶〕うさを晴らす。〔中酒〕酒を飲みすぎて気分を悪くする。〔杯觥〕さかずき。〔蘆簾〕葦で編んだすだれ。〔瓦鼎〕湯を沸かす素焼きの鍋。〔養痾〕病氣療養する。山陽は以前、神経症を患っていた。〔熟〕絹織物が精練されていること。ここでは、夏物の生絹の衣服ではなく、冬物の練絹の服を来ていることをいう。〔生〕未熟であるさま。〔共〕『詩鈔』は「閑」に改める。〔消費〕費やす。過ぐす。〔長昼〕『詩集』は「長夏」に作る。〔喚家童〕『詩鈔』は「欲呼童」に改める。〔短檠〕丈の低い燭台。

21 題龜元鳳女少琴畫竹

龜元鳳の女少琴の画竹に題す

柔荑落墨自清雄

柔荑 落墨 自ら清雄

非是尋常林下風

是れ尋常の林下の風に非ず。

傳得君家盤硬法

伝え得たり君が家の盤硬の法、

寫 佗 龍 影 翠 橫 空

佗の竜影を写して翠空に横たわる。

龜井昭陽の娘・少琴が画いた竹に題する

しなやかな腕から筆で画き出される竹の絵は自然と上品で力強く、これは尋常の竹林の賢人の趣きではない。／彼女が緑色を紙上にほとばしらせて画いた墨竹を見れば、あなたの家の斬新な画法が伝えられているのがよくわかる。

『詩鈔』卷三、『詩集』卷十一に「過元鳳題其女少琴墨竹」と題して収める詩に「織指尖刃竜影横、胸中有竹一揮成。匠心何似爺文苦、万葉千枝逐次生」とある。恐らくはその詩の初案。「元鳳」19の詩の注参照。「少琴」龜井少琴のこと。昭陽の娘で、名は友、通称を少琴といった。詩画に秀で、同じく筑前の原采蘋とともに「鎮西二女史」と称された。中村真一郎『頼山陽とその時代(上)』一二三頁参照。「柔荑」美人の白くしなやかな手。『詩経』衛風の「碩人」の詩に「手は柔荑の如し」とあるのに拠る。「落墨」筆をおろす。「林下風」世俗を超越した婦人の趣き。『世説新語』賢媛篇に「王夫人(謝道韞)は神情散朗、故より林下の風氣有り」とあるのに拠る。「盤硬」旧来のパターンに陥らず、斬新である意。唐の韓愈の「土を薦む」の詩に、孟郊の詩を評して「空に横たわって硬語を盤らしむ」といったのに拠る。「竜影」ここでは墨竹のこと。「横空」前掲の韓愈の詩に見える語に基づく。

22 爲子登題畫枇杷

子登の為に画ける枇杷に題す

纍纍垂金煙雨邊

累累たる垂金煙雨の辺、

與棗爭熟孰鮮妍

棗と熟を争って孰れか鮮妍なる。

著花却是避渠地

花を著くるに却って是れ渠の地を避く、

應知雪香難比肩 應に知るべし雪香 肩を比し難きを。

松永子登のために枇杷の絵に題する

そば降る小雨の中に黄色い枇杷の実がたわわに実り、梅とどちらが美しいか艶やかさを競っている。／花を咲かせるのに梅の咲くところを避けているのは、白い梅の花の美しさには枇杷の花などとうていかなわなないからだろう。

この詩は『詩鈔』には見えず、『詩集』巻十一にのみ収める。「子登」松永子登。20の詩の注参照。「累累」数の多いさま。「垂金」木になっている枇杷の実を指す。「煙雨」そば降る細雨。「椶」梅。「鮮妍」あでやかで美しい。「渠」「他」と同じ。「応知」知ってもらいたい。「応」は期待・希望を表す。『詩集』は「知」を「識」に作る。「雪香」白い花。ここでは梅の花。「比肩」同等の地位を占める。

23 長碕竹枝 節録八首 長碕竹枝 八首を節録す

A

肥海松魚始上街	肥海の松魚始めて街に上り、
火雲四作亂峰堆	火雲四もに乱峰の堆きを作す。
連朝少女風方熟	連朝少女 風方に熟し、
等候洋船入港來	等候す洋船 港に入り来るを。

長崎の歌 八首を選んで書く

肥州の海の鯉が初めて長崎の街に陸揚げされる頃、夏の夕暮れの雲が四方にさまざまな峰の形を作る。／風がきまつた方角から吹く六七月になると、毎日、少女はオランダの船が入港するのを待っている。

〔竹枝〕「竹枝詞」と同じ。16の詩の注参照。〔節録八首〕『詩鈔』卷三には「長碕謡十解」（十解は十首の意）と題して十首を、『詩集』卷十一には「長碕謡十二解」として十二首を収める。但し以下のうちBは『詩鈔』には見えず、『詩集』の「十二解」の中のみ収める。このAの詩は『詩鈔』では「十解」の第一首、『詩集』では「十一解」の第一首として収める詩の初案。〔肥海〕肥州の海。『詩鈔』『詩集』は「火海」に改める。〔松魚〕鯉。「火雲」夏の夕暮れの雲。杜甫の「多病熱を執りて李尚書を懐い奉る」の詩に「奇峰碑兀として火雲升る」とある。〔四〕『詩鈔』『詩集』は「稍」に改める。〔作乱峰堆〕南宋の范成大の「秋前風雨し頓に涼し」の詩に「暮雲渾て乱峰の堆きを作す」とある。〔連朝〕毎日。〔熟〕風がきまつた方角に吹く意。〔少女〕『詩鈔』『詩集』は「坤位」に改める。〔等候〕待つ。『詩鈔』『詩集』は「等待」に改める。〔洋船〕ここではオランダの船を指す。『倭漢三才図絵』卷十四・外夷人物の「阿蘭陀」の条に「商賈を好んで遠国に交易す。…其の次官なる者毎年六七月長崎に来る」とある。『全伝』によれば山陽が長崎に到着したのは五月二十三日のことであり、離れたのは三か月後の八月二十三日であるから、この詩が書かれたのもあるいは「六七月」の頃であったとも想像される。

B

白榜青尊乘暮天	白榜	青尊	暮天	乗天
撐過海船繫橈邊	海船	撐過	繫	橈邊
請君莫咲銀杯小	請	君	莫咲	銀杯
				小なるを、



涵得東吳萬里船 涵し得たり東吳万里の船。

第三、用坡翁全句。

第三は、坡翁の全句を用う。

私は夕暮れの薄闇に乗じて杯を携え、舟を漕ぎ出し、竿を櫓のあたりにつないで停止する。／＼どうか銀のさかずきが小さいのを笑わないでもらいたい、この小さな杯の中に、はるばる東呉に旅する船をすっぱり浮かせることができるのだから。

第三句は、蘇軾の詩句をそっくり借りて使った。

この詩は『詩鈔』には見えず、『詩集』に「十二解」の第五首として収める。「白榜」白木の櫓。転じて船を指す。「青尊」酒を酌む杯。「撐」さおをさして舟を進める。「海船」ここでは山陽の乗る小舟。「請君莫笑銀杯小」宋の蘇軾の「銀杯の小なるを笑う莫かれ。喬太博に答う」の詩に「請う君笑う莫かれ銀杯の小なるを」とあるのを用いる。「涵得東吳万里船」杯の酒に「東吳万里の船」が映っていることをいう。「東吳」は古代中国の呉の地のこと。今の江蘇・浙江両省の東部一帯。杜甫の「絶句」の詩に「門には泊す東吳万里の船」とある。「第三……」この七字は『詩集』には見えない。

C

朝朝舉案與眉齊 朝朝案を挙げて眉と齊しく、

一狎吳郎是艶妻 一たび吳郎に狎るる是れ艶妻。

看取心情冰雪潔  
看取す心情冰雪の潔きを、  
鐵漿不肯染瓠犀  
鐵漿肯えて瓠犀を染めず。

毎日、お膳を眉と同じくらいまで高く捧げ持つ遊女の姿は、もうすっかり他国の男になれ親しんだ美しい妻のようだ。／鉄漿で白い歯を黒く染めようとしなが、誰しも彼女の汚れない貞操を見るだろう。

中国人の妾となった遊女を歌った作。『詩鈔』は「十解」の第六首、『詩集』は「十二解」の第七首として収める。「(朝朝) 毎日。〔拳案与眉齊〕妻が夫を敬うさま。「案」は脚付きの食膳。『後漢書』逸民列伝の梁鴻の伝に「(梁鴻) 婦る毎に、妻為に食を具え、敢えて鴻の前に於いて仰視せず、案を挙げて眉に齊しくす」とあるのに拠る。「(呉郎) 呉の地の男。「郎」は女性から夫または愛人に対する呼称。「艶妻」美しい妻。「看取」見る。「取」は意味のない助字。「冰雪潔」水や雪のように純白で貞操が固い。「鉄漿」おはぐろに用いる、歯を黒く染める液。かね。当時、結婚した婦人は歯を黒く染める風習があった。「瓠犀」ユウガオの種子。転じて綺麗に並んだ美人の歯の喩え。『詩経』衛風の「碩人」の詩の「齒は瓠犀の如し」に拠る。遊女なので一般の婦人のように、日本の風俗であるおはぐろはしないのである。

D

眼語相承兩意同  
眼語相承承けて両つながら意同じく、  
添香捧茗指呼中  
香を添え茗を捧ぐるも指呼の中。  
洞房不用煩傳譯  
洞房用いず伝訳を煩わすを、

自有靈犀 一點通

おのずか れいさい  
いってんつう 自ら靈犀の一點通ずる有り。

目遣いだけで二人は意思の疎通をはかり、香をたき茶を入れて出すのもちよとした指図で十分である。／寢室でのことも通訳など必要なく、自然と心は通じ合っている。

Cに続いて、長崎の遊女を歌ったものと思われる。『詩鈔』は「十解」の第七首、『詩集』は「十二解」の第九首として収める。この詩はその初案。〔眼語〕目遣いによって気持ちを知らせる。〔添香〕香をたく。〔茗茶〕茶。〔指呼中〕ちよとした指図で事が足りる意。なお以上の二句、『詩鈔』『詩集』は「捧茗添香願指中、双双眼語意何窮」に改める。〔洞房〕奥深い部屋。ここでは特に寢室での事柄を指している。〔伝訳〕通訳。〔靈犀〕犀の角。伝説では犀の角の内部には根元から先まで白い筋が糸のように通っており、反応が敏感であるとされていた。これによって二つの心が相通することを喩える。〔一點通〕唐の李商隱の「無題」の詩に「心に靈犀の一點通ずる有り」とあるのに拠る。

E

鬢側釵横 夢一場

びんかたむかみざしとせ  
うんぐ じょう 鬢側き釵横たわる夢一場、

耐佗雲雨 盡情狂

かれ うんう じょうつ 佗が雲雨の情を尽くして狂うに耐す。

眠醒蜀帳 春如海

ねびりも けいちよう 眠醒めて蜀帳、春海の如し、

銀鼎燒餘 安息香

ぎんてい しょうじゆ あんそくこう 銀鼎焼き余す安息香。

気がつけば鬢の毛は傾き、簪は外れて横におかれている、夢のような一時、女は男の意のままとなって身を委ねる。  
 / 眠りから目覚めると、寝室のとばりの中は銀の香炉でたいていた安息香の香りが残って、春の海のように一面に広がっている。

Dで歌われた遊里の一室における男女の交わりを詠じた詩。『詩鈔』は「十解」の第九首、『詩集』は「十二解」の第十一首として収める。この詩はその初案。(夢一場) 一度の夢。「場」は場面の回数を数える助数詞。(雲雨) 男女の情事。なおこの第二句、『詩鈔』は「尤雲殢雨耐他狂」、『詩集』は「尤雲殢雨耐他狂」に改める。(蜀帳) 毛織物のとばり。(春如海) 元の蘇天爵の詩(韻府拾遺引)に「梅花枝上 春 海の如し」とある。(銀鼎) ここでは銀製の香炉を指す。(安息香) スマトラ・ジャワ原産の落葉高木・安息香の樹脂で作った芳香の一種。『詩鈔』『詩集』は「真腦香」に改める。

F

碧欄紅燭閃瓊卮 碧欄紅燭 瓊卮に閃き、

扇様洲前移棹遅 扇様洲前 棹を移すこと遅し。

試倚船窗呼姉妹 試みに船窓に倚って姉妹を呼べば、

認它夜宴侍胡兒 認む它的夜宴に胡兒に侍るを。

出島の蘭館は、青い手すりと赤い灯光が玉のさかずきに映ってきらきらと光り、その前を一艘の舟がゆっくりゆっくり漕ぎ進んでゆく。/ 舟の窓に寄りかかっていた遊女が試しに「姐さん」と呼んでみると、彼女は夜の宴会でオランダ人にお酌しているのがわかった。

出島の蘭館に侍る遊女とその前を通り過ぎる舟の中の遊女のさまを描写した詩。『詩鈔』は「十解」の第五首、『詩集』は「十二解」の第六首として収める。この詩はその初案。〔碧欄〕出島の蘭館の青い手すり。〔紅燭〕赤い灯光。〔瓊卮〕玉杯。〔扇様洲〕扇状の中州。すなわち、ここでは扇形埋立地であった長崎の出島のこと。鎖国中は唯一の貿易地としてここにオランダ人を住まわせており、また当時、遊女は、役人・通訳・特定の商人などとともに出島への出入りを許される数少ない存在であった。〔移棹遅〕杜甫の「李十一白に寄す二十韻」の詩に「竜舟 棹を移すこと晩し」とある。なお以上の二句、『詩鈔』『詩集』は「扇洲楼下滯漿遲、碧檻紅灯閃玉卮」に改める。〔姉妹〕妓女。〔它〕彼女の意。ここでは蘭館に呼ばれている遊女の姐さん。『詩鈔』は「它」、『詩集』は「他」に改める。〔胡兒〕外国人に対する蔑称。ここでは蘭館のオランダ人を指す。

G

煙波源處是蘇州

煙波源えんぱげんまる處ところ是れ蘇州そしゅう、

脈脈芳心附海鷗

脈脈みやみやたる芳心ほうしん 海鷗かいおうに附す。

自慰吾儂勝織女

自みづか慰なぐさむ吾儂われ 織女したくじよに勝り、

一年兩度返郎舟

一年いちねんりやうど兩度りやうど 郎ろうが舟ふねを返むかうと。

もやがたちこめた水面の行き着く先はいとしい人のいる蘇州であるから、募る思いを鷗かもめに言付ける。／一年に二度、彼の船を出迎える私は、織女よりは恵まれていると自ら慰める。

遊女の立場から中国人に対する恋情を詠じたもの。『詩鈔』は「十解」の第八首、『詩集』は「十二解」の第十首として収める。この詩はその初案。〔煙波〕もやがたちこめた水面。『唐詩選』に収める崔顥の「黃鶴樓」の詩に「煙波江上 人をして愁えしむ」と

ある。「蘇州」ここでは愛人のいる場所を意味する。「脈脈」心中に波打つ女性の思い。『文選』に収める「古詩十九首」に「盈盈たる一水の間、脈脈として語るを得ず」とある。「附海鷗」鷗に頼んで、中国の愛人に自分の思いを伝えてもらう。なお以上の二句、『詩鈔』『詩集』は「盈盈積水隔音塵、穿眼来帆阿那边」に改める。「吾儂」「我」と同じ。ここでは佳人の自称。「織女」たなばた伝説の女主人公である織女。「一年兩度逐郎舟」当時、中国の貿易船は年に二度長崎へ来航していた。従って年に一度しか牽牛に会えない織女に「勝」っているのである。

H

金鬣芳柔壓海腴

金鬣きんりょう 芳柔ほうじゅう 海腴かいゆをあつし、

百杯泉釀瀉眞珠

百杯ひゃつばいのせんじょう泉せんじょう釀せんじょう 眞珠しんじゆをそそ瀉そそぐ。

客誇拇戰稍高格

客きやくはほこ誇るほこ拇ぼ戰せんや稍せうや高こう格かくなるを、

昨夜三贏碧眼奴

昨夜さくや三さんたみびか贏かつへ碧へ眼ま奴が奴ど。

鯛は香り豊かで柔らかいという点で海産物の第一であり、それを肴に泉州の酒をたらふく飲んでゐる。／客は昨晚、拳で中国の男に三度勝ったので、自分の方が少しくレベルが上だと自慢している。

『詩鈔』は「十解」の第四首、『詩集』は「十二解」の第四首として収める。この詩はその初案。「金鬣」鯛のこと。「鬣」は魚のひれ。鯛を漢語では俗に棘鬣といい、「閩書」巻百五十一南産志下・棘鬣魚に「その鬣棘のごとく、紅紫色なり」とある。「金鬣」はこの呼称に倣ったものであろう。「芳柔」香りがよく身が柔らかい意か。「海腴」漢語では一般に人參の別名であるが、「腴」には肥

えた肉の意があり、ここでは海産物の意に用いる。「泉釀」今の大阪府の南部にあたる泉州で作られた酒。「真珠」酒のこと。7の詩の注釈参照。「搦戦」宴席で行われる「拳」のこと。指で互いに数を作り、その合計を当てて勝負を争う遊戯。「稍高格」『詩鈔』『詩集』は「成高手」に改める。「碧眼奴」三国呉の孫権は生まれつき緑色の眼をしていたところから「碧眼児」と呼ばれた。ここではその故事を用い、呉から来た男というほどの意。『詩鈔』は「呉下奴」、『詩集』は「辮髮奴」に改める。

余鬢已二毛、情況非復昔日。強爲綺語、徒造口業、亦聊紀風俗、供它日觀玩耳。讀者幸莫認爲揚州小杜也。

余が鬢已に二毛にして、情況復た昔日に非ず。強いて綺語を爲し、徒に口業を造るは、亦た聊か風俗を紀し、它日の觀玩に供するのみ。讀者幸わくは認めて揚州の小杜と爲す莫かれ。

私の鬢の毛はすでに白髪まじりで、もはや昔のようではない。強いて汚れた言葉を用いて、このような詩を作るといふ悪業をなしたのは、少しばかりこの地の風俗を書き留めて、後の鑑賞に供しようとするものである。読者にはどうか私を酒色に溺れた揚州の杜牧と同一視しないでほしい。

以上の四十一字は『詩集』にのみ見える。「二毛」白髪まじり。「綺語」仏教語で閨房の事柄や愛欲に及ぶ汚れた言葉のこと。「口業」仏教語でいう「三業」の一つで、言葉による悪業。「觀玩」鑑賞し、味わう。「認爲」〜と見なす。「揚州小杜」唐の詩人、杜牧のこと。杜甫と区別して「小杜」という。揚州の役人の時代に酒色にふけり、「十年一たび覚む揚州の夢」の句がある。16Dの詩の注参照。